

# 如来蔵仏教における生と死

相馬 一意

(龍谷大学)

## 一 はじめに

この研究においてあつかう資料の範囲は、『如来蔵経』『不増不減経』『勝鬘経』、そして『涅槃経』という四種の経典と、『宝性論』『仏性論』と『大乘起信論』という三種の論典である。<sup>(1)</sup> 生と死にかかわる記述を精査したうえで、議論というわけではないが、ここにかかげた経論に述べられている生と死に関する記述をみながら、表題にかかわっていささか考察を試みようとするものである。

残念ながら、以上の経論にみられる記述からは、「如来蔵仏教における生死観」といったまとまった明確な視点は認めることができないように思う。したがって、本学会の共同研究テーマ「仏教の生死観」に即した研究成果も示し得ないのであるが、それでは責めを果たすことができないので、テーマに沿って少しばかり周辺のことがらを整理すること、テーマを考えてゆく手がかり、足がかりでも手に入れたいと思っている次第である。

いうまでもなく、一切衆生は如来蔵(者)である(一切衆生有如来蔵、sarvasattvas tathāgatagarbha) (如来蔵経)という主張によって成り立つ如来蔵仏教であるから、衆生界＝法身(不増不減経)であり、如来蔵によって生死あり

（勝鬘經）とされていて、ことさら生死のみを別出して、独自の生死観などを示す必要はないといえるのかも知れない。この点で、テーマに即した研究をなし得ないと述べたわけであるが、でも反対に、それゆえにこそ特異な生死に関する見方があるといえるのかも知れない。そこで、十分に問題を整理し得たという自信はないのであるが、生と死をめぐる記述について議論しておきたいと思うわけである。

## 二 生死とは（生死のすがた）

まず最初に、生死についての一般的な記述を整理しておこう。

衆生は迷界に輪廻をして種々の苦を受けている存在であること、これを認めていることは如来蔵仏教においてもいうまでもないところである。一切衆生……輪転生死受苦無量（如来蔵經、大正一六・四五八中）、衆生種々煩惱長夜流転生死無量（同四五八下）、一切衆生從無始世來周旋六道往來三界於四生中輪廻生死受苦無窮（不增不減經、大正一六・四六六上）といった表現は、至極普通のものとしていくらでも出あうことができるはずである。生死の苦に流され、生死の苦を受ける存在、それが衆生であって、私たちのすがたに他ならないといえよう。また、「輪転」とか「輪廻」の語がなかにみえているように、この生死の苦は何度でもくり返されるので、一回かぎりの生とか死という觀念もないといえる。あるいはまた、『涅槃經』をひもとけば、長編の經典であるだけに、いたるところに生死の苦悩を受けていることが述べられていて、枚挙に暇がない。さらに、この生死の苦を「大海」「熾火」「過患」「大河」「曠野」「繩」等々に喩えられたりもしている。

このような生死のあり方は、論書においても同断といってよいと思う。後説するように、そこから厭い離れること

を説くことに主眼が移ってゆくのではあるが、まずはこの長大な「生死苦」を認めることから出発している点では変わりがないのである。無始世生死波流転五道（宝性論、大正三一・八一九上）と述べられているし、随生死流漂没六道無始輪転我説名衆生界（仏性論、大正三一・八〇六中）とも語られている。また、『大乘起信論』では、「生死苦」「生死染法」という用語が用いられているが、これらから生死の苦を認めていることは明らかといえよう。

こうして、生死とは苦の世界であり、このままで無条件に肯定されるべきものではない。出世間を指向した仏教からの当然の帰結であろうし、そこから「出離すべきもの」として生死があり、私たちの現実世界も、否定され出離すべきものとして考えられている、とひとまずは前提できるものと思われる。如来蔵仏教においてもこの点は変わりがないのである。

ただし、『大乘起信論』には、

四者聞修多羅説一切世間生死染法皆依如来蔵而有、一切諸法不離真如

（四には修多羅に、一切世間の生死の染法は皆如来蔵に依りて有なれば、一切諸法は真如を離れず、と説くを聞きて）（大正三二・五八〇上）

五者聞修多羅説依如来蔵故有生死依如来蔵故得涅槃

（五には修多羅に、如来蔵に依るがゆゑに生死有り、如来蔵に依るがゆゑに涅槃を得、と説くを聞きて）（同右）

とあるように、この生死は（反対の概念である涅槃も同様にあるが）、「如来蔵」にもとづいてあることがいわれている。あらためて指摘する必要はないかも知れないが、これは『勝鬘經』の

世尊生死者依如来蔵。以如来蔵故説本際不可知。世尊有如来蔵故説生死是名善説。……

世尊若無如来藏者不得厭苦樂求涅槃。（大正一二・二二二中）

という記述によった主張である。だから、ここにいる修多羅とは『勝鬘經』に他ならない。事実、『宝性論』では、はつきりと『勝鬘經』と經名をあげて引用したうえで、同様の主張がなされている<sup>(3)</sup>。

ということで、生死の染法は如来藏によるといい、生死も涅槃もともに如来藏によってあると述べられている。これは、如来藏仏教として独自の主張であるといえよう。生死は苦であって、怖畏すべきものではある。しかしながら、それにしてもその生死が如来藏によってあるとすれば、ただ苦であるに止まらないということになるのであろう。それゆえ、つぎに生死の意義といったものに考えを進めなければならない。

### 三 生死の意義

生死の意味あいについて考えるにあたり、『涅槃經』に散説されている字句をひろってみると、「無我者名為生死」（大正一二・三七七下）、「無我者即是生死」（同五二三中）、「生死流轉猶如幻化」（同四〇六下）、「空者一切生死」（同五二三中）、「生死無常謬見」（同五二三下）等が得られた。常樂我淨の四徳波羅蜜を説く『涅槃經』的な生死觀といえようか。生死の世界が、無我であり幻化であり空であり無常であるというのであれば、格別に変わった説でも何でもないが、無我こそが生死であるとか、生死は幻化でしかないとか、生死無常は謬見であるとかいうのは、だいぶんと特異な見方といえよう。右の句が出ている文脈を無視しての言であるが、無我、空、無常こそが顛倒の見であると主張されているようにもみえて、興味をそられるもののようにみえる。

さらには、このような記述がみうけられた。すなわち、

生死本際凡有二種。一者無明二者有愛、是二中間則有生老病死之苦。是名中道、如是中道能破生死故名爲中、以是義故中道之法名爲仏性。(同五二三下)

とあるものである。すなわち、生死の本際は無明あるいは有愛であって、これが生死老病の苦のもとであるということ。ここまでは通常の仏教の思想といえよう。しかし、これが中道(仏性)によって破せられるものだといっているのである。『涅槃經』で強調される仏性を説明して、中道でもって仏性を語るのは、極めて『涅槃經』的であるといわねばなるまい。が、前項に言及した「如来藏に依るがゆゑに生死有り」という主張の『涅槃經』的な説明であると理解することができよう。

これらの記述から、あえて単純な結論を求めれば、常楽我淨たる涅槃(真如・仏性)からみて、生死は本質的なものではなく、厭い捨て去るべきものでしかないし、仏性によって確実に(いとも簡単に)捨て去られる、と考えられているようである。「捨て去るべきもの」という点は、通仏教の主張に異ならないともいえるが、でも、この生死を恐れるにはおよばない、かように真如の裏打ちがあるのであるから、仮のものはやがて捨てられて、真実に向かうことに間違いないといった樂觀論がただよっているようにも感じられる。

『宝性論』は、『不増不減經』の、

舍利弗、即此法身過於恒沙無辺煩惱所纏、從無始世來隨順世間波浪漂流往來生死、名爲衆生。(大正一六・四六七中)

という表現を教証として出して、その上で不淨時の衆生たる凡夫のすがたを語っている。やはり『不増不減經』の舍利弗、不離衆生界有法身、不離法身有衆生界。衆生界即法身法身即衆生界。舍利弗此二法者義一名異。(同右)

という記述を示した上での言及であるから、もちろんのこと、ここに述べられていることが絶対的な生死の本質とは言いがたいが、表面的なあり方としてとらえることができる。すなわち、

如一切世間依虚空生滅、依於無漏界有諸根生滅。火不燒虚空。若燒無是処如是老病死不能燒仏性。地依於水住水復依於風風依於虚空空不依地等。如是陰界根住煩惱業中、諸煩惱業等住不善思惟、不善思惟行住清淨心中、自性清淨心不住彼諸法。陰入界如地煩惱業如水不正念如風淨心界如空。依性起邪念念起煩惱業。依因煩惱業能起陰入界。依止於五陰界入等諸法有諸根生滅。如世界成壞。（大正三一・八三二下。原文は五字句の偈頌）

（一切の世間は虚空に依りて生滅するがごとく、無漏界に依りて諸根の生滅有り。火は虚空を焼かず。焼に是の処り無きがごとく、是のごとく老病死も仏性を焼くあたはず。地は水に依りて住し水また風に依り風は虚空に依るも、空は地等に依らず。是のごとく陰界根は煩惱業中に住し、諸の煩惱業等是不善思惟に住し、不善思惟の行は清淨心中に住するも、自性清淨心は彼の諸法に住せず。陰入界は地のごとく、煩惱業は水のごとく、不正念は風のごとく、淨心界は空のごとし。性に依りて邪念起こり、念は煩惱業を起こす。煩惱業に依因してよく陰入界起こる。五陰界入等の諸法に依止して諸根の生滅する有り。世界の成壞のごとし）

という記述である。くわしい解釈は省くが、「諸根の生滅」「老病死」「陰界根（陰入界）」「煩惱業」「不善思惟」「世界の成壞」等の語に、客塵煩惱の過のすがたを見てとることができる。「無辺煩惱所纏」とか「随順世間波浪漂流往来生死」とかいわれた生死が、こういう言葉でもって表現し直されているのである。ただ、この文中にも出ているごとく、「仏性」や「自性清淨心」が基礎にあつて成り立つ生死のあり方である。これを忘れてはならないであろう。

これをまとめて長行の釈で『宝性論』は、

如是依邪念風災業行煩惱水災老病死等火災吹浸燒壞陰入界世間而、自性清淨心虚空常住不壞。(同八三三上)

(是のごとく、邪念の風災と業行煩惱の水災と老病死等の火災に依りて陰入界の世間を吹浸し燒壞すれども、自性清淨心の虚空は常住にして不壞なり)

とまとめている。すなわち、生死とは、「邪念と業行煩惱と老病死等が陰入界の世間を吹浸し燒壞するあり方」としている。この点には、格別奇異なることはないが、これを述べたのちに「されども、このような変化はあくまで表面のことであって、おおもとの法界たる如来蔵は不生不滅であり、不変異である」と主張するのが如来蔵仏教の一つの特徴であったことは、すでに述べてきたとおりである。

『宝性論』はこの不浄時の衆生をまとめるにあたり、また『勝鬘經』の記述、

如来蔵世間言説故有死有生。死者謂根壞生者新諸根起、非如来蔵有生有死。(大正一二・二二二中)

を引いて、世間言説(『宝性論』の引文では世諦)上でのみ生死有りとおさめている。<sup>(5)</sup>「死者謂根壞生者新諸根起」という、肉体的な生死についての言及もあるが、『宝性論』では、これについての解説や新たな受けとめ方などは何もない。

いずれにしても、つぎに、この生死の苦を厭い捨てることが問題になってくるであろう。『不増不減經』には、

舍利弗即此法身厭離世間生死苦惱、棄捨一切諸有、欲求行十波羅蜜撰八万四千法門修菩提行、名為菩薩。(大正

一六・四六七中)

とあって、これを厭離しようとするところから仏道修行が始まるといい、その存在を菩薩という名で語っている。

『宝性論』はこの浄不浄時の菩薩を語るにあたり、この『不増不減經』の文を引きつつ、菩薩は、

如来蔵仏教における生と死(相馬一意)

依慈悲力故、示現生老病死而遠離生等。（大正三一・八三三下）

依大悲力現於三界、示現生示現老示現病示現死而、彼無有生老病死諸苦等法。（同右）

というように、生死を遠離していることをいう。あるいは、生老病死の状態を示しはするがそれから苦を受けないというのである。もっとも、右の文に「依慈悲力」「依大悲力」とあるように、ここでは仏道を歩み向上してゆく存在としての菩薩というより、菩薩の姿を現じて衆生救済にあたる菩薩に重点が移っているので、厭離の観点は少なくなっているが……。

また『仏性論』には、

此清淨性事能有二。一於生死苦中能生厭離。二於涅槃欲求樂願。若無清淨之性、如是二事則不得成。（大正三

一・七九九下）

という記述がみられ、「清淨の性」にもとづくものとして、生死を厭離するところ、涅槃を欲求するところが生じることがはっきりと述べられている。もちろん、この『仏性論』でも、直後に「經中に」というだけで、經名を明示してはいないが、生死も涅槃も如来蔵によっているという、先の『勝鬘經』の文を引いている。

このように、生死の裏には、それに左右されない如来蔵の存在を認めて、その上で生死を議論していることは確かである。これが『大乘起信論』になるとよりはっきりしてくる。前項に出したとおり、本論は「如来蔵に依るがゆゑに生死有り、如来蔵に依るがゆゑに涅槃を得」という『勝鬘經』の説を土台においた上で論を進めている。すなわち「生死の苦を厭うこと」も「無上道に趣向する」すなわち「修行をして涅槃を樂求する」のも、すべては如来蔵があればこそである。そうして、その具体的なはたらきを、「熏習」という特殊な語で語っている<sup>(6)</sup>のである。この『大乘



起信論』における熏習説についてのくわしい解説は、いまは省かなければならないが、

云何熏習起浄法不断。所謂以有真如法故能熏習無明、以熏習因縁力故則令妄心厭生死苦樂求涅槃。（大正三二・五七八中）

一者分別事識熏習。依諸凡夫二乘人等厭生死苦隨力所能以漸趣向無上道故。二者意熏習。謂諸菩薩發心勇猛速趣涅槃故。（同右）

依此二義恒常熏習以有力故能令衆生厭生死苦樂求涅槃自信己身有真如法發心修行。（同右）

若雖有外縁之力而内浄法未有熏習力者、亦不能究竟厭生死苦樂求涅槃。（同五七八下）

といった記述によれば、各種の熏習の力によって、涅槃に趣くために発心し修行して、仏道を歩むことができるというのである。これら引文のなかには如来蔵の語は出ていないが、この熏習のおおもとに如来蔵があることは疑いのないところ。生死の世界それ自体では格別意味のあるものではないと思われるが（仮の世界ではないが）、如来蔵に裏打ちされて、涅槃へ指向する場として意味をもってくるのである。このように位置づけることで、生死の意義が考えられるのではなからうか。

#### 四 願うべき生死（無住処涅槃）

こうした厭い捨てられるはずの生死が、願い求められる場合がある。菩薩が衆生教化の場所として現るものであり、いわゆる「無住処涅槃」と称せられる境地である。少しばかりここでの考察対象からは焦点がずれるような気もするが、如来蔵仏教には特徴的なことであると考えられるので、ここに整理しておきたいと思う。

『宝性論』は、浄不浄時の菩薩について、

菩薩如是知 得離於生死 憐愍衆生故 示現有生滅（大正三一・八三三中）

と偈頌にて示したうえで、前項に原文を出しておいたように、「慈悲の力に依るがゆゑに生老病死を示現すれども生等を遠離す」と語り、また「大悲力に依りて三界に現ずるをもつて、生を示現し老を示現し病を示現し死を示現すれども、彼には生老病死の諸苦等の法有ること無し」とも述べている。そして、現今の『大集經』海慧菩薩品とされている『大海慧菩薩經』なる經を引き、「自在心をもつて三界に現生するは彼の諸の衆生を教化せんがためのゆゑなり」等の句を示す。そのうえで、

如是菩薩即得生於大悲之心。為救一切諸衆生故、現前無漏智通而廻轉不取寂滅涅槃。以為教化諸衆生故、廻取世間乃至示現凡夫人地。（大正三一・八三四下）

（是のごとく菩薩はすなはち大悲の心を生ずることを得。一切の諸の衆生を救はんがためのゆゑに、無漏智通を現前すれども廻轉して寂滅涅槃を取らざるなり。諸の衆生を教化せんと為すをもつてのゆゑに、廻して世間を取りないし凡夫人の地に示現するなり）

と述べてまとめている。無住処涅槃という後世の熟語としては示されていないが、『勝鬘經』（大正二二・二二一中）を引くかたちで、「世尊よ、有為の世間有り、無為の世間有り。世尊よ、有為の涅槃有り、無為の涅槃有り」と語つたうえで<sup>(7)</sup>の言及であるから、この無住処の境地について述べていることに疑いはない。すなわち、菩薩は、衆生教化の舞台として生死の世界に立ち現れるのであり、生死は、かかる菩薩の活動の場として重要な意義を有しているということであろう。

この無住処の觀念は『仏性論』にも明らかである。

「由大悲不捨生死」(大正三一・七八七中)や「雖行生死而不染雖行涅槃亦非淨」(同七九七下)、あるいは「生死涅槃平等」(同七九九中)等の句に、このところが窺えるし、

由此如実法界道理門故、即是涅槃即是生死不可分別。即是得入不二法門亦不二住無住処故。由滅諸惑不住生死、由本願故不住涅槃。由般若故諸惑得滅、由大悲故本願得成。(同七九九下)

(此の如実法界の道理門によるがゆゑに、すなはち是れ涅槃すなはち是れ生死と分別すべからず。すなはち是れ不二法門に入るを得たればまた一にもあらず二にもあらず無住処に住するがゆゑなり。諸惑を滅するによりて生死に住せず、本願によるがゆゑに涅槃にも住せず。般若によるがゆゑに諸惑滅することを得、大悲によるがゆゑに本願成ずることを得るなり)

という表現をみれば、なお一層明確であらう。「不住生死」「不住涅槃」とあり、「無住処」の語も出ている。

さらに『大乘起信論』をみてみると、

一者行根本方便。謂觀一切法自性無生離於妄見不住生死、觀一切法因縁和合業果不失、起於大悲修諸福德攝化衆生不住涅槃。以隨順法性無住故。(大正三二・五八〇下)

として、信成就發心をした菩薩について「不住生死」「不住涅槃」が語られている。<sup>(8)</sup>

くわしく諸論の構成を考察してゆくならば、必ずしも全同の内容になっているわけではない。法身||衆生界||如来藏という等式を認めたうえで、衆生を、凡夫・菩薩・仏の三種に分けた場合、その中の菩薩のあり方を示しているのが『宝性論』である。大常波羅蜜に住する法身の功德、つまり仏の功德としてのあり方をもって説いているのが『仏

性論』である。『大乘起信論』においては、菩薩道を歩みはじめた修行者の心構えとして説かれている。あるいは、願って迷界にすがたを示す菩薩についていうのか、生死に浮沈しつつその境遇をのりこえるべきものとして語っているのか等々、相違が多々あって、仏あるいは菩薩の無住処涅槃の境地といった単純なまとめにはなじまない。

いまここに認めうることは、最低限のことで、生死の中にあつて、生死に染せられない生き方が強調されていて、それがいわば「無住処」と述べられているということである。一つ、生死というもののとらえかたを私たちに暗示するものではなからうか。

## 五 『大乘起信論』にみる不覚の具体相とその転換

『大乘起信論』に本覚・始覚・不覚が説かれていることはよく知られていよう。この不覚を語って、この論は、無明業相・能見相・境界相、智相・相続相・執取相・計名字相・起業相・業繋苦相といういわゆる三細・六塵説をいい、また「生滅の因縁」として言葉をかえて、「意と意識の転」として、業識・転識・現識・智識・相続識というものを語っている。そのところをまとめて、

是故三界虚偽唯心所作。離心則無六塵境界。此義云何。以一切法皆從心起妄念而生、一切分別即分別自心。心不見心無相可得。当知、世間一切境界皆依衆生無明妄心而得住持。是故一切法如鏡中像無体可得、唯心虚妄。以心生則種種法生心滅則種種法滅故。（大正三二・五七七中）

（是のゆゑに三界は虚偽にして唯心の所作なり。心を離るればすなはち六塵の境界無ければなり。此の義云何。一切の法は皆心より起り妄念して生ずるを以て、一切の分別はすなはち自心を分別するなり。心の心を見ざれば相の得べきもの無

し。当に知るべし、世間の一切の境界は皆衆生の無明妄心に依りて住持することを得たり、と。是のゆゑに一切の法は鏡中の像の体として得べきもの無きがごとく、ただ心のみのものにして虚妄なり。心生ずればすなはち種々の法生じ心滅すればすなはち種々の法滅するを以てのゆゑなり

と述べているとおりである。すなわち、一言でいえば、無明にもとづく私たちの妄念あるいは日常の分別認識の活動こそが不覺のすがたである。そして、ここにいう「六塵の境界」「一切の法」「一切の分別」「無明妄心」「心のみのものにして虚妄」なるものが、その有り様であり、生死の中身であるとしているのであろう。

であるから、前項にすでに示したとおり、

観一切法自性無生離於妄見不住生死。(同五八〇下)

(一切法の自性は無生なりと観じて妄見を離るれば生死にも住せず)

ということになるのである。『大乘起信論』では、この生死のものは阿梨耶識・無明・妄念(いまいうところの妄見)であるから、それを断ずることが生死をこえることだといっていると理解される。

本論の「修行信心分」は、いまだ正定に入らざる衆生に信を勧め、修行を教えている章であるが、そこに、専心に三昧を修すべしとして、「精勤して専心に此の三昧を修学すれば現世にまさに十種の利益を得べし」と語っている<sup>(9)</sup>。その利益の一つに、

七者遠離憂悔於生死中勇猛不怯。

(七には憂悔を遠離して生死中に於て勇猛にして怯ならず)

というものがある。この一つの利益だけでいうわけでもないが、ここにいう「憂悔を遠離して」という表現を、先の

妄念を断じていることだとうけとつてもそれほど不当ではあるまい。あるいは「生死をこえる」ということが、「生死中に於て勇猛にして怯ならず」の状態を意味していると考えられることもできよう。

これ以上のくわしい論述は認められないので、あとは論者の思いにすぎないのであるが、ここに、生死にあって生死に染まらないあり方が考えられているようである。前項に問題にした無住処涅槃の境地も考えに含めて、結局、生死のあり方の質的転換が述べられているのではなからうか。生死は、残念ながらそのままでは価値があるとはいえない。しかし、その本質を十分に知って、そこを活動の舞台にすることが生死を脱することだし、生死を転換することにつながるといえようか。

## 六 ま と め

これまで、あまり歯切れのよい論述ではなかったが、生死をめぐる記述を考察してきた。このままでは、はじめにも述べたように、共同研究テーマに即したものとはいえないので、まとめをして、論旨の通ったもの、テーマに沿った方向性をもったものにしておきたいと思う。

生死の問題が仏教の根本的な課題であるにしても、それ自体がいかなる意味を持っていて仏教の体系のうえでどういう役割を果たしているか、こういう点に関しては、本研究の範囲では格別の議論はなされていないようにみえる。なされていたのかも知れないが、論者の考察においては見うけられなかった。生死あるいは生老病死を苦ととらえる視点は、資料を限定したうえでの如来藏仏教ではあったにしても、これは十分に認められる。第二項における最初の論点として示したところである。しかし、その苦を徹底的に見つめているかどうかということになると、必ずしもそ

それは十分ではないような気がする。苦を超克することを目的とし、苦を直視することから出発したのが仏教である。この長い長い歴史にのって登場したのが如来蔵仏教であって、そういう仏教者の営為を踏まえたうえで、如来蔵仏教の生死苦観もあるようである。したがって、これについて今さら特別の議論を必要としていないように思われる。

ただ、この生死の染法も、如来蔵によってあるととらえることは、如来蔵仏教の特徴といえよう。苦の本質にかかわって、世間の現象法も出世間のものも、すべては如来蔵によるということを強調している点、これは少しばかり特異であり、苦の超克に関して楽観的な観点を付与しているようである。とにかく、この考えを、第二項の二番目のこととがらとしてとりあげておいた。

第三項では三点をとりあげている。すべてこの「如来蔵による」という生死の本質論にかかわってのものである。

第一点は、『涅槃経』によるもので、生死の実際は無明と有愛であるが、これが中道（仏性）によって破せられるものという考えを紹介している。常識的な苦の本質たる無明と有愛、この否定を仏性（中道）の存在で語っていることが、ここの「如来蔵による」という内容にかかわると考えたためである。あるいはまた、これで、生死を仮のものと考えていることが見てとれたといってもよからう。

第二の点は、『宝性論』におけるもので、不浄時の衆生（凡夫）の生死と不生不滅の本質とをいう記述を問題にしている。ここでは、生死が表面的なものとしてあるということと、そのおおもとにある「仏性」や「自性清浄心」のすがたが明らかにされている。また、おおもとの法界たる如来蔵が不生不滅であることはいうまでもないが、生死は「世間言説」（世諦）にすぎないととらえられていることは興味の引くところであった。

最後の第三の点は、仏道修行中の菩薩が、生死苦を厭離して修行するあり方を検討したものである。『宝性論』『仏

性論』と『大乘起信論』の三論における修行の様子を考察し、それぞれが「如来蔵による」ことで、よりスムーズに生死の世界から離脱できると考えられていることが確認できたと思う。とくに『大乘起信論』では、この如来蔵からはたらかかけが「熏習」という特殊な用語で語られている。この場合は、もちろん熏習のうちの「浄法熏習」の方をいうのであるが、非常に興味深い観念であろう。

このように、この第三項は、生死は如来蔵によってあり、そのはたらかかけを受けて、生死を厭離して仏道修行に励む場としての意義がある、と述べたものである。これが生死の本質といえるものではなからうか。

第四項は、菩薩の利他活動というか、もろもろの衆生を教化するすがたを問題にしたものである。ここでも『宝性論』『仏性論』『大乘起信論』の三論に、同様の観念にもとづく記述が見られたので、それらを取りあげている。『宝性論』では浄不浄時の衆生、すなわち菩薩についていうところ。『仏性論』は、「顕果品」に出ているもので、右の本文中にも記したように、仏の功德についていうものと理解できる。『大乘起信論』は、信成就発心をした菩薩について語るものである。

したがって、必ずしも高い境地の菩薩ということではなくして、菩薩であるとの自覚をもって仏道修行中の菩薩の行うべきこととしても語られているようであるから、「無住処涅槃」とあつまりいうことはできない。あくまで、無住処涅槃的なあり方ということである。

もちろんのこと、衆生を教化する場合は、生死の世界である。だから、この菩薩は願って生死の世界に立ち現れるのであるが、これまた当然のことに、生死・世間に流されて生きているわけではない。仏または高位の菩薩が生死に染せられないのはいうまでもない。こういうあり方から、論者は、生死に生きて生死に流されない生き方というものを、



読み取ろうとしたのである。それは、生死のあり方を正しく見つめて、そこでどのように生きてゆくか、という本学会のテーマに沿ったものであらうと考えたからである。生死というものを正しく見つめて積極的に位置づけるとするなら、その位置づけの一つの例として、この無住処のあり方を考えてみたいというのである。

このつたない考察において、ただ一点、「死者謂根壞生者新諸根起」といった生死に関する肉体的な表現が認められたが、他はすべて、生死を人間の認識的あり方として語っているのが如来藏仏教であったと思う。その一つの典型例として『大乘起信論』のいう不覺の具体相（これもある意味で生死のあり方であらう）を取りあげたのが第五項である。いわゆる三細・六塵説、あるいは阿梨耶識にもとづく業転現等の五識説である。

ここで問題にしたかったことは、迷いすなわち生死とは、こころの虚妄・妄念の活動相であって、それを転換すれば新たな別の地平が開けてくるということである。それがまた、生死にあって生死に染まらないあり方といえるのではないかということである。

以上、生死をめぐってのいささか煩雑な考察であった。残念ながら、生命とか生命の本質とかいったテーマについては、何の言及もなし得なかった。それに、生命の尊厳ということについても、ことさらに論及を示すこともできなかった。その点、まったく焦点のずれた発表であったかと、忸怩たる思いである。が、仏教が出世間を標榜しているかぎり、単純に生死・生命を肯定することはないのであらうから、この一回かぎりの生を大切に、といった認め方、とらえ方もしないはずであって、右のような諸点を考えるのもあながち無意味ではないはずと思ってもいる。

とにかく、生死は断すべきもの、厭い離れようと思つて理想のあり方に邁進する場としてあるということである。また、生死を活動の場として、生死に流されないで生きることが大切で、その状態が十分に得られたなら、生死を脱

することであるし生死を転換した理想的状态になったといえるのではなからうか。如来藏仏教の生死をめぐる考察によつて、論者は、この程度の結論を得た次第である。

# 註

(1) 考察対象をこれだけにしぼったのは、主として論者の能力の都合である。現在のところ論者が責任をもって論及できるのはこの範囲に限られるということである。

(2) この『涅槃経』も、いまは考察のための時間不足、準備不足という理由で、曇無讖訳『大般涅槃経』（四〇巻、大正三三番、いわゆる北本涅槃経）だけに限っている。

(3) 大正三一・八三九中の記述を見よ。

(4) 『宝性論』は、この議論において、不浄時・浄不浄時・善浄時の三時を語り、この時による差別の三種の人をまた、衆生・菩薩・仏（あるいは凡夫・聖人・諸仏如来）と呼び、これら三時によってその表面的な差異と、「如来の法性は一切処に遍至して染浄時に依つても不変不異なることを明かし」ている（大正三一・八三二中）。すなわち、如来の性が、いかなる時においても不変不異、不生不滅であることを説いているのである。

(5) 大正三一・八三三中に、「是故聖者勝鬘經言、世尊生死者依世諦故說有生死、世尊死者諸根壞世尊生者新諸根起」とある。

(6) 熏習については、唯識説におけるものがよく知られているが、ここではそれと幾分か異なった意味で用いられている。あるものが対象にはたらきかけてある特殊な影響を生じさせる、といった意味で、第六項の「まとめ」にも少しばかり説明しておいたように、悪い結果を引き起こす「染法熏習」と、反対によい結果を生じさせる「浄法熏習」とがあるとされている。この本文に出しているものは、そのうちの浄法熏習の例である。くわしくは、大正三二・五七八上〜五七九上を参照のこと。

(7) 大正三一・八三四中〜下。

(8) 信成就発心とは、「謂依不定聚衆生有熏習善根力故信業果報能起十善厭生死苦欲求無上菩提得值諸仏親承供養修行信

心経一万劫信心成就」(大正三二・五八〇中)とあるように、仏道修行の初歩の段階で起こす発心である。したがって、この菩薩は正定聚になったとはいえ、まだまだ修行途上の存在である。

(9) 十種の利益をあげておけば、①「常為十方諸仏菩薩之所護念」、②「不為諸魔惡鬼所能恐怖」、③「不為九十五種外道鬼神之所惑乱」、④「遠離誹謗甚深之法重罪業障漸漸微薄」、⑤「滅一切疑諸惡覺觀」、⑥「於如来境界信得增長」、⑦「遠離憂悔於生死中勇猛不怯」、⑧「其心柔和捨於橋慢不為他人所惱」、⑨「雖未得定於一切時一切境界處則能減損煩惱不樂世間」、⑩「若得三昧不為外緣一切音声之所驚動」である。大正三二・五八二下を参照されたい。

